

日本語のアカデミック・ライティングに規範は必要ないか：
「構成」面の分析に基づく提案

ARE STANDARDS FOR JAPANESE ACADEMIC WRITING NECESSARY?:
PROPOSALS BASED FROM ANALYSIS ON ESSEAY ORGANIZATION

田中真理, 名古屋外国語大学
久保田佐由利, イースタン・ミシガン大学
Mari Tanaka, Nagoya University of Foreign Studies
Sayuri Kubota, Eastern Michigan University

1. はじめに

本研究¹は日本語のアカデミック・ライティングにおける good writing 研究の一環で、第 1 言語 (L1) と第 2 言語 (L2) の小論文 (essay) の相互考察によって、効果的なライティング教育を検討することが最終目標である。本稿では、英語のアカデミック・ライティング (例えば, Bailey & Powell, 2008 ; Reid, 2000 ; 門田他, 2006 ; 上村・大井, 2004 等) において規範とされている下記の (1) ~ (3) を、日本語ライティングにおいても「(マクロ) 構成」の「規範」として積極的に取り入れてはどうかという提案を行う。

- (1) パラグラフ概念：1つのパラグラフ (形式段落) には1つのアイディアを述べる。また、パラグラフは1文から成ることはない。
- (2) 3部構成：序論・本論・結論から成り、それにはバランスが必要である。
- (3) 序論と結論の呼応：結論には序論で述べたことを言い換えて、呼応させる。

1.1 アカデミック・ライティングと小論文

アカデミック・ライティングは、文章を大きく「説明的文章」と「文学的文章」に分類した際、前者に属するもので、本稿では、特に説明・論証をレトリカルモードとする大学で書く文章と定義する。ここではその中の小論文のマクロ構成について分析、検討する。

小論文は、一般的には「意見文」等の論理的な文章で、大規模試験や入学試験、採用試験等のハイステークステストで用いられ、時間制限、字数制限のもとで書かれることが多い。実際の大学生活で小論文を書く機会はあまりないと思われるが、アカデミック・ライティングの基本を習得するのに有効だと考えられる。

マクロ構成の変遷を見ると、日本人学生の書く英語小論文は、1980年代には主張が最後にくる帰納型 (尾括型) であったが (Fathman & Kobayashi, 1984; Oi, 1986), その後、主張が最初にくる演繹型 (頭括型) になってきた (Hirose, 2003) と指摘されている。一方、日本語小論文も、英語ライティング教育や初年次教育の一環としてのアカデミック・ライティング教育の影響もあり、主張が最

¹ 本研究は科学研究費基盤研究 (C) 22520542 「日本語の good writing : 第 2 言語と第 1 言語による比較」 (田中真理代表) の助成を受けた。また、基盤研究 (B) 26284074 「日本語ライティング評価の支援ツール開発: 「人間」と「機械」による評価の統合的活用」 (田中真理代表) の研究の一部である。

初にくる「頭括型」や最初と最後の両方に述べられる「双括型」になってきた（佐々木，2000；木戸，2001；二通，2001；Hirose，2003）と推察される。

しかし、その一方で、日本語ライティングには英語のアカデミック・ライティングのような規範的なレトリックがない（cf. 二通，2005）というのも事実であり、ライティング評価においても日本語教師の「構成」面の捉え方は一貫していない。田中・坪根（2011）の good writing 調査では、10名中8名の教師が1位ないしは2位に挙げた小論文を2名が最下位にしている。このトップになった中国語話者の小論文には序論がなく、さらに、最初の段落の背景説明が長く、それだけで全体の半分以上を費やしていた。日本語教師は知識としては「マクロ構成」を理解していても（メタ認知の働く「アンケート」では言及）、実際の評価時には、プロトコル等を調べると「マクロ構成」はあまり意識されていないようであった（田中・坪根，2011；坪根・田中，2015；田中，2016）。

さらには、「日本留学試験（EJU）」のような公の大規模試験において、評価基準には「効果的な構成」と謳いながら、解答例2例ともに「序論」がない（日本留学試験記述問題解答例）という現実がある。

このような点を考え合わせると、「マクロ構成」は日本語のアカデミック・ライティングの good writing の必須要素ではないとも言える。日本人学生が書く小論文は「頭括型」や「双括型」になってきたと前述したが、実際に学生（留学生を含む）の書いた小論文を見ると、上述のように序論がなかったりもする。また、あっても序論や結論が1文から成ることも少なくない（田中・久保田，2014）。

1文からなる序論や結論は、学習者が序論や結論（マクロ構成）の存在を知っていても、そこに何を書けばいいのか分かっていない可能性のあることを示唆する。さらには、マクロ構成のバランスについても周知されていないと察せられる。

1.2 文献調査

そこで、まず、L1 及び L2 の日本語の文献調査を行い、前述の提案事項（1）～（3）が既に「規範」となっているのか、つまり、どの程度記載されているのかを調べた。以下の（a）～（g）の文献別に、（1）～（3）の記述があるかどうか調べ、ほぼ全てに明示的に記載されている場合には●、不完全な記載あるいは一部にしか記載のない場合には▲、記載のない場合には×を付した（表1）。

- (a) 事典（国語学，文章論）
- (b) 文科省の小学校・中学校・高等学校の指導要領解説 国語編
- (c) 中学校・高等学校の国語（L1）の教科書
- (d) L1 参考書，入試・採用試験対策本等
- (e) L2 ライティング・テキスト（一部 L1 ライティング・テキストと共用）
- (f) L2 日本留学試験の対策本
- (g) 英語ライティングの要素を取り入れた L1，L2 のライティング・テキスト

表 1 文献調査のまとめ

	文献名 (出版社は省略)	(1) パラ グラフ 概念	(2) 3部 構成	(3) 序論 と結 論の 呼応
(a)	事典 (国語学, 文章論) ・権島忠夫 (編) (2000) 『文章構成の基本大事典』 ・中村明 (2005) 『センスをみがく文章上達辞典』 ・中村明 (2007) 『日本語の文体・レトリック辞典』 ・中村明他 (編) (2011) 『日本語 文章・文体・表現事典』	▲	▲	▲
(b)	文科省の小学校・中学校・高等学校の指導要領 ・小学校学習指導要領解説 国語編 (平成 20 年 6 月) ・中学校学習指導要領解説 国語編 (平成 20 年 7 月) ・高等学校学習指導要領解説 国語編 (平成 22 年 6 月)	×	●	▲
(c)	国語 (L1) 教科書 【中学校の国語の教科書】 ・『新しい国語』1 (2014) 東京書籍 ・『新しい国語』2 (2014) 東京書籍 ・『新しい国語』3 (2014) 東京書籍 【高校の国語の教科書】 ・『国語表現』(2014) 東京書籍 ・『新編 国語総合 言葉の世界へ』(2016) 教育出版 ・『改訂版 高等学校 国語総合』(2008) 第一学習社	×	●	●
(d)	L1 参考書, 入試・採用試験対策等 ・倉澤栄吉・野地潤家 (2006) 朝倉国語教育講座 4 『書くことの教育』 ・牛頭哲宏・森篤嗣 (2012) 『現場で役立つ小学校国語科教育法』 ・平川敬介 (2009) 『2010 年度 600 字で書く文章表現法 「小論文」「論文」ってどんな文章?』 ・小論文 QQ 舎 (2005) 『小論文入門テキスト』 ・新星出版社編集部 (2006) 『就職試験 受かる小論文・作文模範文例』	×	●	▲
(e)	L2 ライティング・テキスト等 ・佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ (1986) 『実践にほんごの作文』 ・小笠原信之 (1993) 『外国人学生のための大学合格 小論文』 ・倉八順子 (1997) 『日本語の表現技術 読解と作文 上級』 ・浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』 ・二通信子・佐藤不二子 (2000) 『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』 ・アカデミック・ジャパニーズ研究会編著 (2001) 『大学・大学院留学生の日本語』②作文編 ・アカデミック・ジャパニーズ研究会編著 (2002) 『大学・大学院留学生の日本語』③論文読解編 ・友松悦子 (2008) 『中級日本語学習者対象 小論文への 12 のステップ』	●	●	▲
(f)	L2 日本留学試験の対策本 ・佐々木瑞枝監修 (2004) 『アカデミック・ジャパニーズ重点攻略 日本留学試験実践問題集 記述』	1文 : ×	●	(●)
(g)	英語ライティングの要素を取り入れた L1, L2 ライティング・テキスト ・田中真理・阿部新 (2004) 『Good Writing へのパスポート 読み手と構成を意識した日本語ライティング』 ・佐渡島沙織・坂本麻裕子・大野真澄 (編著) (2015) 『レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド 大学生・大学院生のための自己点検法 29』	●	●	●

表 1 より、(2) の「3 部構成」は、ほぼ全ての文献に記載されており、日本語においても規範となっていると言えそうである。(3) の「序論と結論の呼応」に関しては、国語の教科書には書いてあるが、L1 全般においては徹底されておらず、L2 に関してもほぼ同様である。(1) の「パラグラフ概念」については、L1 では「段落」に関して諸説あり、規範と言えるものがない。改行に関しても一致した見解はない。L2 では「パラグラフ概念」が取り入れられているものもかなりある。「段落が 1 文から成ることはない」というのは、全体の字数に大きく関わる。日本留学試験等の字数制限 (400~500 字) 下では、結論が 1 文になることもやむをえず、「呼応」も同じ文の繰り返しになっている。

このように、マクロ構成 (序論・本論・結論) はある程度規範となっているようであるが、そのバランスについての記述はあまりなく、図式化したものは田中・阿部 (2014) 等に限られる。マクロ構成のバランスが悪いのは、学習者がその存在を知っていても全体的なイメージとして捉えていない、あるいは、マクロ構成のバランスを考えながら「書く」という作業に慣れていないのかもしれない。そこで、次に学習者がどのようなライティング教育を受けてきたのか、調査した。

1.3 L1 ライティング教育アンケート調査

ここでは、「(マクロ) 構成」の「規範」(1) ~ (3) が日本の中学校・高校で実際にどの程度教えられているのか、アンケート調査 (一部の学生にはインタビュー) を行った結果について述べる。調査の概要は以下である。

時期：2016 年 6 月~7 月

対象：愛知県 N 大学外国語学部日本語学科 1 年生~4 年生：計 165 名、
大学院生：7 名 (留学生は除く)

内容：中学・高校・大学でのライティング教育：小論文の指導やフィードバック、ライティング教育の内容 (構成、段落、接続表現、読み手等)

N 大学ではアカデミック・ライティング教育を 1 年次から 2 年次まで行っているため、学生たちはライティング教育の内容を中高で学習したのか大学入学後に学習したのか明確に記憶していなかった。しかし、入学して日が浅い 1 年生に関しては、小論文指導をまったく受けていないと回答した学生が 52 名中 13 名いた。

全体を通して分かったのは、中高でのライティング教育は、学校によってかなり差があるということである。「3 部構成」に関しては、読解の授業で学習したが、実際に書くことはしなかったという学生もいた。小論文は、入試のための特別クラスや予備校・塾で学習したという学生も多く、高校によっては小論文指導を業者に委託しているところもあった。中高でライティングに時間をかけるのはカリキュラム上難しいとの現場の声も聞いた。しかし、その一方で、クラスターリングで構想を練り、何度も書き直し、ピア評価をしたという学生もいた。

結局、文科省の指導要領や教科書には「3 部構成」、教科書にはさらに「序論と結論の呼応」についても記されているが、日本の中高でそれらが確実に教えられているとは言い難い。つまり「規範」は作られているが、浸透させることには

成功していないと言えよう。大学ではアカデミック・ライティングの授業が行われているところもあるが、これも徹底されているわけではない。その他、就職や教職試験のための小論文セミナーの行われていることが分かった。しかし、そこでは目的（合格）重視のストラテジ的な指導が行われているようである。次節では、L1 及び L2 日本語学習者の実際的小論文のマクロ構成について分析、考察を行う。

2. データ（小論文）分析の方法

2.1 小論文の書き手

書き手は、日本語母語話者（J）54 名（日本在住の大学生で大学院生 2 名を含む）と、中国語を L1 とする日本語学習者（C）53 名（中国在住の大学生と、中国の大学から交換留学等で日本の大学へ留学してきた大学生・大学院生：日本でライティング教育を受けていない）、英語を L1 とする日本語学習者（E）50 名（アメリカ在住の大学生で、日本留学経験のある学生や卒業生を含む）である。

2.2 プロンプト

上述の書き手，J，C，E から以下のプロンプト 1 とプロンプト 2 の小論文を収集した。どちらも「比較・対照」と「論証」のレトリカルモードを主とする。

・プロンプト 1: 「ファーストフードと家庭料理」（Food）：ファーストフードと家庭料理の「比較・対照」の説明と「食生活」についての意見を書いて、大学新聞に投稿する（資料 1-1）

・プロンプト 2: 「通学授業と遠隔授業」（Learning）：2 つの立場から 1 つの立場を選び、理由を述べて意見を書き、小論文を募集している大学へ送る（資料 1-2）

執筆に際しては、辞書やインターネットの参照は不可、時間は 60 分を目安とするが制限はなし、字数は 600~ 800 字とした。

2.3 データ収集

J に関してはオンラインツール（Moodle）を使用して小論文のみを収集し、C と E に関しては、オンラインツール（Dropbox）を使用して、① 承諾書、② フェイスシート、③ J-CAT 日本語テストの結果、④ プロンプト 1 とプロンプト 2 の小論文、⑤ L1 でのライティング教育や本研究の小論文執筆に関するアンケート回答を収集した。収集時期は 2012 年 7 月～2015 年 7 月である。

2.4 分析方法

「3 部構成」（序論・本論・結論とそのバランス）と「序論と結論の呼応」についての分析は、以下の方法による。

「3 部構成」については、(a) まず、序論や本論や結論に相当する段落（形式段落）があるかどうか調べた。(b) 次に、序論や結論に相当する段落がなくても、それらに該当する内容の箇所が本論の段落に埋め込まれていないか調べた。

(c) さらに、序論・本論・結論の量的バランスを調べた。以上を踏まえ、本稿では、小論文の「マクロ構成」を A タイプ、B タイプ、C タイプに分類した。A

タイプは序論・本論・結論が揃っているタイプで、Bタイプは、序論ないしは結論、あるいはその両方が欠落しているタイプである。Cタイプは、形式段落は2つ以上あるが、序論や結論に書くべき内容が本論の段落に埋め込まれているタイプである。それぞれ、サブタイプ (A-1~A-3, B-1~B-3, C-1~C-3) を設けたが、本稿では、紙幅の都合上、A~Cのメインタイプと、Aのサブタイプについて述べる。

「序論と結論の呼応」については、序論・本論・結論が揃っているAタイプにおいて序論と結論が呼応しているかどうか、具体的には、序論で言及したことが結論で触れられているか、序論で言及したことが矛盾していないかを調べた。つまり、まず量的バランスを調べ、次に質的に調べたわけである。

3. 結果

3.1 基本情報

CとEのL2 proficiencyの指標としては、J-CAT日本語テストの総得点を用いた。Cの平均値は275.9点 ($SD = 48.8$)、Eの平均値は223.3点 ($SD = 39.2$)であった。Cの平均値は上級前半 (日本語能力試験レベル1)、Eは中級後半 (同レベル2) で (J-CAT 互換表)、全体的には1レベル異なるが、「構成」を見るには問題ないと判断した。次に、J、C、Eのプロンプト別・文字数を表2に示す。

表2 プロンプト別・文字数

	J		C		E	
	Food	Learning	Food	Learning	Food	Learning
<i>n</i>	54	54	53	53	50	50
平均	673.0	670.7	743.3	709.5	735.0	686.8
標準偏差	98.0	131.2	165.7	116.2	212.8	195.5
最小値	474	337	535	548	377	391
最大値	949	1137	1403	1177	1453	1620
中央値	647.5	644.5	725	671	679.5	648

文字数はプロンプト Food もプロンプト Learning も、JのほうがCやEよりも少なく、CとEの文字数の傾向はよく似ている。J-CAT日本語テストによるL2 proficiencyが低いからといって、Eが長く書けないというわけではないことが分かる。

3.2 小論文の分析結果

以下では、L1別・プロンプト別にマクロ構成を見ていく。つまり、序論や結論に相当する形式段落があるかどうかを見ていくわけだが、ここで形式段落が全くないものは分析から外した。その結果、小論文数はプロンプト別に、Jは51、50、Cは変わらず53、53、Eは44、43となった。

3.2.1 マクロ構成

前述のように、本稿では小論文のマクロ構成をAタイプ、Bタイプ、Cタイプに分類した。Aタイプは序論・本論・結論に相当する段落のあるもの、Bタイプ

は序論ないしは結論，あるいはその両方が欠落しているもの，Cタイプは序論ないし結論の内容に相当するもの，あるいはその両方が本論に埋め込まれているものである。表3はL1別・プロンプト別のマクロ構成のタイプ別内訳である。

表3 L1別・プロンプト別 マクロ構成タイプ

	Aタイプ		Bタイプ		Cタイプ	
	Food	Learning	Food	Learning	Food	Learning
	J (n=51, 50)	62.7%	82.0%	25.5%	0	11.8%
C (n=53, 53)	73.6%	79.2%	18.9%	13.2%	7.5%	7.5%
E (n=44, 43)	56.8%	60.5%	36.4%	23.3%	6.8%	16.3%

表3から，まずは，どのL1においても，またどちらのプロンプトにおいてもAタイプのもっとも多いことが分かる。しかし，L1別に見ると，EのAタイプがもっとも少ない。つまり，序論や結論が欠落したり，本論に埋め込まれたりしているのである。EはL1（英語）ライティングの影響でマクロ構成がもっともできているだろうと予想したが，そうではなかった。一方，Cはプロンプトの影響をあまり受けずにマクロ構成ができており，Jにはプロンプトの影響が認められる。Bタイプを見ると，Jはプロンプト Learning では序論や結論の欠落はゼロであるが，プロンプト Food では1/4が序論ないしは結論，あるいはその両方が欠落している。具体的には，プロンプト Learning（指示文：通学授業と遠隔授業のどちらを選ぶか）では立場を明らかにするために「～を選ぶ」という「序論」が作られるが，プロンプト Food（指示文：ファーストフードと家庭料理を比較し.....）の場合には，いきなり本論，つまり「ファーストフード」から書き始める例がかなり認められた。

次ページの表4はプロンプト Food，表5はプロンプト Learning のL1別・Aタイプの内訳である。Aタイプは「序論・本論・結論」のあるものだが，Reid（2000）と田中・阿部（2014）を参考に，それらのバランスでサブタイプを作った。A-1は序論・結論がそれぞれ全体の15～20%を占めるもので，理想的なバランスがとれているものである。A-2, A-2I, A-2Cは，それぞれ順に，序論と結論の両方，序論，結論が短すぎるものである。A-3, A-3I, A-3Cは，逆に長すぎるものである。また，右端の2つのタイプは，それぞれ「序論が短く，結論の長いもの」「序論が長く，結論の短いもの」を示している。

表4と表5のJを見ると，プロンプト Food でAタイプが32名，プロンプト Learning でAタイプが41名である。Jはプロンプト Learning のように誘導（通学授業と遠隔授業のどちらを選ぶか）があると序論が書けると前述したが，表5

の A-2 (31.7%) , A-2I (17.1%) , A-2C (17.1%) の割合が高いことから、適切な長さで序論や結論が書けていないことが分かる。この中には、序論や結論が 1 文のものも含まれている。C にはプロンプトに大きく関係なく、この傾向が認められる。E は A タイプ自体がプロンプト Food で 25 名、プロンプト Learning で 26 名と少ないが、プロンプト Learning では A-1 (バランスのとれているもの) が 61.5% で、J や C よりも遥かに多い。つまり、序論や結論を作れている人は、ある程度の長さ (内容) をもって序論や結論を書いているのである。また、表 4 と表 5 の右端を見ると、C にはどちらのプロンプトにおいても「序論が長く、結論が短い」傾向のあることが分かる。C の小論文を具体的に見ると、序論に背景説明が長々と述べられていることが多い。

表 4 マクロ構成 L1 別・A タイプの内訳 (プロンプト Food)

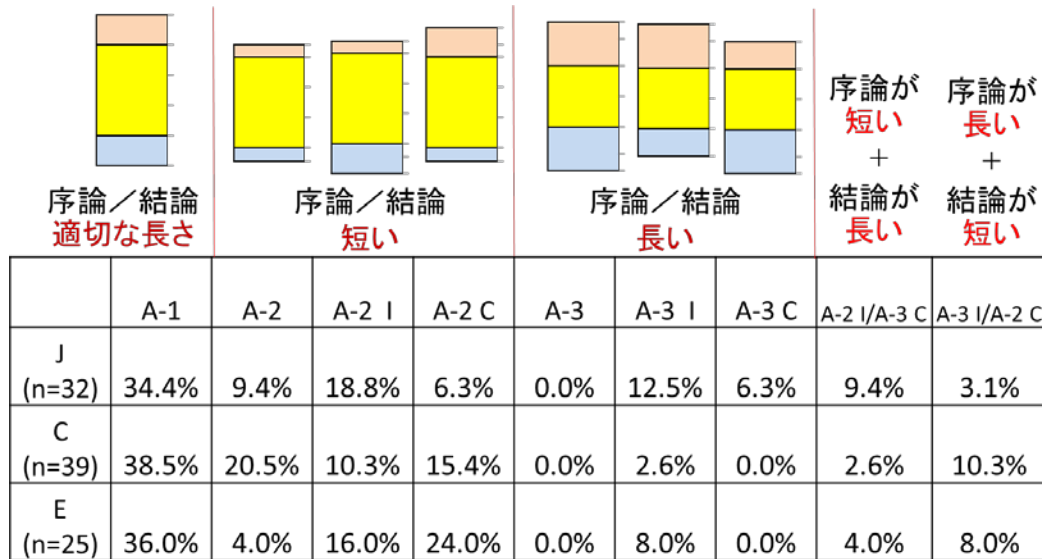
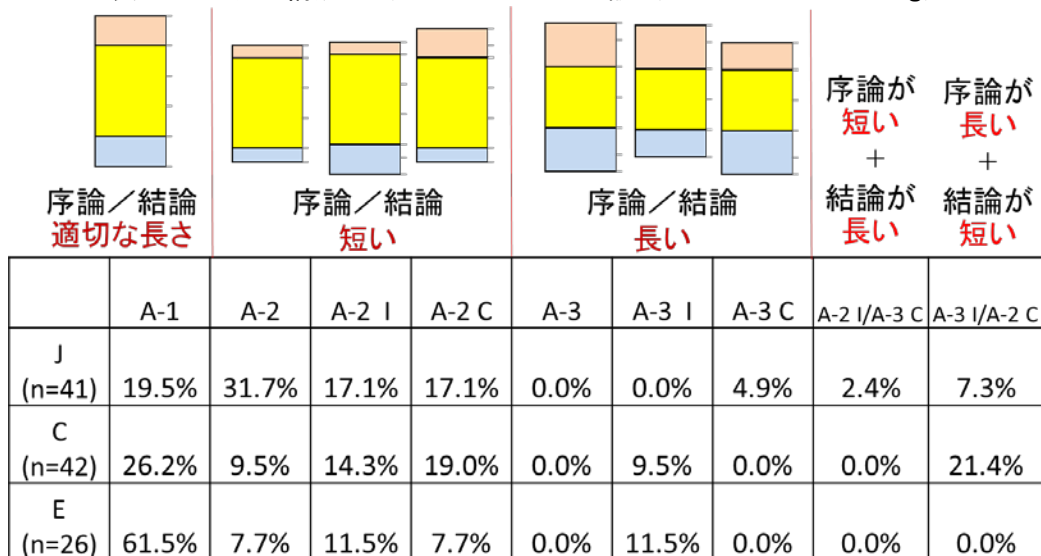


表 5 マクロ構成 L1 別・A タイプの内訳 (プロンプト Learning)



3.2.2 序論と結論の呼応

次に、「序論と結論の呼応」について考察する。プロンプト Food に関しては「ファーストフード」から書き始めるケースがかなり認められたと先に述べたが、この「ファーストフード・家庭料理・結論」という3部構成では、当然、序論と結論の呼応はありえない。また、序論と結論があっても、序論で述べたことを結論で言い換えて述べていなければ、「呼応」は成立しない。資料2では、序論は「世界の食生活の背景」について述べているが、結論はそれには全く触れずに「書き手の主張」が述べられている。表6は、序論と結論が揃っているAタイプのプロンプト別の「序論と結論の呼応（呼応率）」である。

表6 序論と結論の呼応 (Aタイプにおける呼応率)

	プロンプト Food			プロンプト Learning		
	Aタイプ数	呼応のある数	(%)	Aタイプ数	呼応のある数	(%)
J	32	15	(46.9%)	41	20	(48.8%)
C	39	10	(25.6%)	42	10	(23.8%)
E	25	15	(60.0%)	26	16	(61.5%)

マクロ構成ができていいるAタイプの数は、C, J, Eの順で多かった。しかし、呼応しているかどうかを見ると、どちらのプロンプトにおいてもCの呼応率が1番低く、それにJが次ぐ。そして、もっともAタイプが少なかったEにおいて1番呼応率が高いことが分かる。つまり、Eは全体的にはマクロ構成ができていなかったが、その中のマクロ構成ができていいる学習者は序論と結論も呼応していると言え、L1（英語）ライティングの構成が転移している可能性も考えられる。

4. おわりに

本稿では、日本語のアカデミック・ライティングの構成に関して、3つの提案を行った。(1)の「パラグラフ概念」に関しては、L1では新しい動きは見られないが、L2のテキストにおいては積極的に取り入れられつつある。(2)の「3部構成」は文献調査においてはL1においてもL2においても既に規範となっているようである。(3)の「序論と結論の呼応」に関しては、L1の教科書には記載されているが、それ以外のL1の文献、L2の文献での記載は限られていた。

「3部構成」は文献上では規範となっても、現実に学習者がバランスよく序論・本論・結論の形で書いているかという点、2～3節でみたようにそうではなかった。また日本語教師も、田中・坪根(2011)のgood writing調査(2008年～2009年実施)では、「マクロ構成」に対するメタ的な認識はあっても、実際の評価結果では「マクロ構成」はgood writingの必須的な要素とはなっていないようであった。さらに、大規模試験のEJUの解答例(課題1と課題2)を見ると、2例ともに序論がなかった。

そこで、紙幅の都合により詳細は省略するが、日本語教師になろうとしている大学院生を対象に簡単なgood writing調査を行った。N大学の大学院生6名に、EJUの課題1と課題2を、試験と同じ条件(400～500字、30分)で書いてもら

った。次に、6名の書いた小論文にEJUの解答例を混ぜて（全て番号処理）、課題毎にgood writingの順位を（基準を決めずに各自の基準で）付けてもらった。その結果を全員に示し、評価結果について話し合った。

大学院生の小論文には、1名を除き、明確な「マクロ構成」が認められた。課題1に関しては評価が割れたが、課題2に関しては序論のないものの評価が明らかに低く、EJUの解答例の序論の欠落はすぐ指摘された。

このように、大学院生には学部等でアカデミック・ライティングについて学んできたことが評価にも活かされている様子が窺がえた。ただし、序論と結論の呼応については、コメントはなかった。確かに、500字の小論文の中では十分に呼応させるのは難しい。大規模試験には試験としての制約もあるので、字数を600～800字程度にして、普段のライティング学習に小論文執筆を積極的に取り入れではどうだろうか。「マクロ構成」を意識させるには有効だと思われる。

まとめると、L1に関しては、中高の教科書にも積極的な「マクロ構成」や「序論と結論の呼応」（序論で問題を投げかけ、結論でそれに答える等）の記述が見られる。ただし、ライティング教育自体が後回しになっている傾向はある。

L2に関しては、EJUの序論の欠落という現実はあるが、個々のテキストでは積極的に(1)～(3)が取り入れられつつある。日本語教師の「構成」意識も、上述の大学院生の結果を見ると変わりつつあるようであり、今後さらに変わっていくことが期待される。これらを促進させるためにも、(1)～(3)を、日本語ライティングの「規範」として、積極的に取り入れることを提案したい。

最後に、アカデミック・ライティングは、まずは読み手に分かりやすく伝えることが大切である。(1)～(3)に当てはまらないgood writingというものも存在するだろうが、習得途上は基本(型)をマスターすることを優先したい。Good writingにはオリジナリティや読み手をひきつける要素があったほうがいいが、それは最終段階での付加的要素だと考える。

謝辞：本研究に協力くださった学生のみなさんに心より感謝いたします。

参考文献

- 門田修平・氏木道人・伊藤佳世子（2006）『決定版 英語エッセイ・ライティング』コスモピア
- 上村妙子・大井恭子（2004）『英語論文・レポートの書き方』研究社
- 木戸光子（2001）「接続表現と列挙の文章構造の関係（2）」『文藝言語研究 言語篇』40, 41-55.
- 佐々木康子（2000）「課題に基づく意見の述べ方—日本人大学生の場合・日本語学習者の場合—」文部省科学研究費研究成果報告書『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの構築とコーパスの構築』（宇佐美洋代表）219-230.
- 田中真理（2016）「パフォーマンス評価はなぜばらつくのか？—アカデミック・ライティング評価における評価者の「型」」『「評価」を持って街に出よう』第2章 pp.34-53. くろしお出版

- 田中真理・阿部新 (2014) 『Good writing へのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版
- 田中真理・久保田佐由利 (2014) 「アカデミック・ライティングの構成について: L1, L2 双方向からの考察」 *CAJLE 2014 Proceedings*, 163-173.
- 田中真理・坪根由香里 (2011) 「第二言語としての日本語小論文における good writing 評価—そのプロセスと決定要因—」 『社会言語科学』 14(1), 210-222.
- 坪根由香里・田中真理 (2015) 「第二言語としての日本語小論文評価における「いい内容」「いい構成」を探る—評価観の共通点・相違点から—」 『社会言語科学』 18(1), 111-127.
- 二通信子 (2001) 「アカデミック・ライティング教育の課題—日本人学生及び日本語学習の意見文の文章構造の分析から」 『北海学園大学学園論集』 100, 61-77.
- 二通信子 (2005) 「アカデミック・ライティング」 国立国語研究所 (編) 『日本語教育年鑑 2005 年版』 29-41.くろしお出版
- Bailey, Edward P., & Powell, Phillip A. (2008). *The Practical writer* (9th ed.). Boston, MA: Wardsworth.
- Fathman, Ann, & Kobayashi, Hiroe. (1984). Rhetorical Patterns in English and Japanese. *TESOL Quarterly* 18, 737-738.
- Hirose, Keiko. (2003). Comparing L1 and L2 organizational patterns in the argumentative writing of Japanese EFL students. *Journal of Second Language Writing* 12, 181-209.
- Oi, Kyoko. (1986). Cross-cultural differences in rhetorical patterning: A study of Japanese and English. *JACET Bulletin* 17, 23-48.
- Reid, Joy M. (2000). *Process of composition*, 3rd ed. NY: Pearson Education.
- 日本留学試験 : http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/eju/index.html (2016年8月4日)
- J-CAT (Japanese Computer Adaptive Test): <<http://www.J-cat.org/>> (2016年8月4日)

資料 1-1

プロンプト A 「ファーストフードと家庭料理」 Fast Food and Home Cooking

大学新聞が「私たちの食生活 特集号」を出すので、原稿を募集しています。私たちの日常生活では、多くの人々がファースト・フードと家庭料理を食べています。ファースト・フードと家庭料理を比較し、それぞれの良い点や悪い点などを説明して、「食生活」についてのあなたの意見 (600~800字程度) を大学新聞に送ってください。

The campus newspaper is now collecting submissions for a special issue on "Our Eating Habits." In our daily lives many people are eating fast food and home cooking. Please compare the good and bad points of fast food and home cooking, share your opinion about "eating habits" (using around 600 ~ 800 characters), and submit your essay to the campus paper.

資料 1-2

プロンプト B 「通学授業と遠隔授業」 Traditional Education and E-Learning

大学が通学授業と遠隔授業（e-learning）について、学生から小論文を募集しています。大学で勉強する方法として、2つ考えられます。1つは、学生が大学に行って、教師や他の学生と授業で直接コミュニケーションをとりながら勉強する方法（通学授業）です。もう1つは、大学に行かずに、インターネットなどの情報ネットワークとコンピュータを利用して、教師とコミュニケーションをとりながら、自宅などで勉強する方法（遠隔授業：e-learning）です。あなたなら、どちらの方法を選びますか。理由をあげて、あなたの意見を600～800字程度で書いてください。

The university is collecting short essays on "traditional education" and "e-learning." There are two ways to earn a university education. The traditional method is for a student to sit in an actual classroom with other students and receive instruction directly from a teacher. A second, more recently developed method known as "e-learning" (or "distance learning") allows students to complete their studies and interact with teachers from home, via the Internet. Which of these two methods would you choose? In about 600 ~ 800 characters, please give your preference and explain why.

資料 2

序論と結論の呼応がない例

【序論：世界の食生活の背景】

世界の人たちが様々な食生活をしているに違いない。1日にできるだけ多く食べ、その後3日間くらい断食する人もいるそうだ。一般的に言うと、ある人の食生活が本人の国の文化や習慣などに関連している。先進国では、朝から夜まで働くことが普通だから、ほぼすべての人にとっては、家で料理を作る時間は贅沢になっている。それと同時に、ファーストフード店で食事することが過去20年間に我々の食生活に浸透してきた。以前と違い、現在では食べ物が豊富にあり、いつでも安く獲得できる。

【本論：..... 中略】

【結論：書き手の主張】

従って、私はできるだけファーストフード店で食べないようにしている。仕事で忙しいということは本当だが、健康によくはないものをよく食べ、体を壊すと、仕事もできなくなってしまうので、自分の体に入れるものの栄養や品質などをよく気を付けている。他のアメリカ人にこんな風に考えてみてほしい。

[E12-28]